

シコツと千歳の地名解

西田 秀子

千歳市史編さん担当

主任編集員

はじめに

千歳の旧名「シコツ」は、アイヌ地名である。徳川幕府が蝦夷地を直轄した際、初代箱館奉行として派遣された羽太正養はなぶねまさやうが、文化二（一八〇五）年、シコツ川の「シコツ」は音の響きが悪いこと、また、当地が鶴の生息地であることから、「鶴は千年」の中国の故事にちなみ、シコツ川を「千歳川」に改名した。現在の和語「千歳」の呼び名の誕生である。本稿では、「一 改名以前のシコツ」、「二 シコツ川を千歳に改名」、その中で釜加神社の厨子を紹介し、ついで、『増補千歳市史』に記述されて以来、北海道文化財保護協会会員地蔵慶護によって「本当のシコツはどこか、シコツ発祥の地」が論議されてきたが、本稿の「三 シコツ発祥の地について」を記述することで、新たな見解を提示したい。

一 改名以前のシコツ

シコツの意味 知里真志保（2）によると、シコツはアイヌ語でシコツシコト（大きい窪地、大谷）という（以下アイヌ語発音の促音を表す場合は小文字の「ッ」とする）。「シッ」は「大きな」「本当の・真の」という意味を表し、「コツ」は「窪地・凹地・谷間」の地形を指している。

諸記録にみるシコツ 諸記録に現れた「シコツ」を年代の古い順に抄出してみると、おおよそ表1のようになる。絵図で最も古いものは正保元（一六四四）年、幕府が全国の御国絵図作成のために各藩に命じて提出させた

表-1 シコツ名の変遷抄

和暦(西暦)年	文献(『 』)・地図(*)名	しこつ・シコツの記載	備 考
正保元(1644)	*「正保御国絵図」	「ぬま」の図あり。日本海イシカリから太平洋ユウフツへ抜ける「シコツ越え」「ユウフツ越え」の道路を朱色で示す。	松前藩が幕府に献上した絵図。
万治元(1658)	『福山秘府』(安永9年1780年に記録完成)	志古津に弁財天社造立を記録	万治3年ご神体安置。松前藩の史料集成。
寛文10(1670)	「松前蝦夷蜂起巨細上申」	しこつ	「松前下の国しこつと申所の頭鬼菱と申狄」
天和元(1681)	*松前国蝦夷図	志こ津	正保図を基本とし、長久保玄珠(赤水)作。
元禄13(1700)	*元禄御国絵図	志こつ	正保図を基本に改良したもの。
享保8(1723)	『松前年々記』	シコツ	「東蝦夷地シコツト申候所(略)困窮、飢死仕候」
享保16(1731)	『津軽一統志』	しこつ	「ウタウと申狄(中略)しこつへ行詰相果候に付」
元文4(1739)	『蝦夷商賣聞書』	志骨大場所、志骨大将	作者不詳、聞書きによる経済書
寛政9(1797)	『蝦夷巡覧筆記』	シコツ川、シコツ沼(現長都沼)	松前藩士・高橋壯四郎寛光
寛政11(1799)	『蝦夷日記』	支骨川、支骨沼(現長都沼)シコツ十ヶ所	水戸藩医師・木村謙次(近藤重蔵の秘書役) *この年、幕府は「千歳」を含む東蝦夷地を直轄地とする。
文化2(1805)	『休明光記』	千年、千とせ、千歳に改名	徳川幕府箱館奉行・羽太正養著
文化4(1807)	『西蝦夷地日記』	千年川、しこつ沼(現長都沼)	徳川幕府若年寄堀田撰津守の随行者、御小人目付・田草川伝次郎
文化6(1809)	『西蝦夷地旅行日記』	千年、千年沼、シコツ沼(現長都沼)	津軽藩士・竹内甚左衛門
安政4(1857)	『夕張日誌』	支骨湖、志こ津、しこつ沼(現長都沼)	松浦武四郎
文久3(1863)~5	『東蝦夷日誌』	シコツ湖、千歳、	松浦武四郎

ものである。この地図は独立した地図としては残っておらず、わずかにこれを基にして作った「正保御国絵図」の一部として残されているだけである。この絵図には、中央に大きな「ぬま」の図が描かれているだけで、地名シコツの記載はない。だが、日本海のイシカリから太平洋のユウフツへ抜けるいわゆる「シコツ越え」

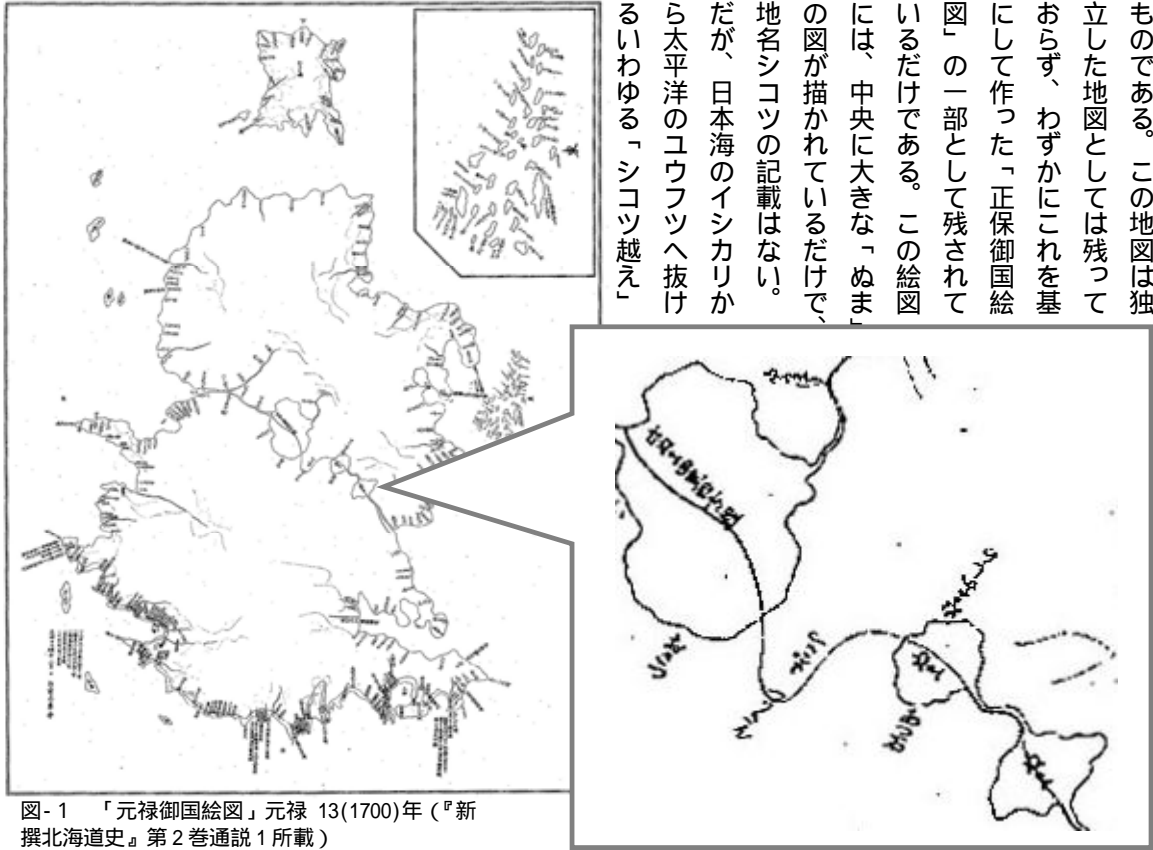


図-1 「元禄御国絵図」元禄 13(1700)年 (『新撰北海道史』第2巻通説1所載)

「ユウフツ越え」の道路が、朱色で描かれている。次の元和元(一六八一)年の「松前国蝦夷図」に「志古津」が登場し、次いで元禄十三(一七〇〇)年の「元禄御国絵図」(図1)には「志古津」、「おさつ」、「ろつさん」の地名が読み取れる。これらは現在の千歳地域を示すものである。

蝦夷地・樺太を实地踏査した地図のうち、最古とみられている先の「正保御国絵図」は、北海道開拓記念館『蝦夷地のころ』に所載されており、「松前国蝦夷図」、「元禄御国絵図」の二点と比較すると、ともにこの「正保御国絵図」を基本に改良し、作成されていることが分かる。

これらの絵図・諸記録は、ともにアイヌ語の音をひらがな・カタカナ・漢字混じりによる一音一字の万葉仮名式で表記している。すなわち、「しこつ」(松前蝦夷蜂起巨細上申『津軽一統志』)、「シコツ」、「シコツ川」(松前年々記『蝦夷巡覧筆記』)、「志古津」(『福山秘府』)である。

漢字表記が現れるのが、「志骨」(『蝦夷商賈聞書』)、「支骨」(『蝦夷日記』)で、いずれも川名や場所名を指している。これらの記録の中で、最古のものと考えられる「志古津」の史料を次に示す。

志古津 『福山秘府』には「志古津」とある。同書は、松前藩主道広が家老松前広長に命じて編さんさせ、安永九(一七八〇)年に完成した松前藩の史料集である。

第拾貳 「諸社年譜並境内堂社部」

一 如来堂 造管之由緒年号不明

東蝦夷地確

「按ルニ慶長十八年此堂建立ナリ

一 弁財天小社 安永七年ニイタリ一百年二十一年ナリ

同 志古津

万治元戌年造管 同三年神体ヲ安置

「按ルニ実八万治三年造立ナルベシ」^朱

ここには万治元（一六五八）年、あるいは同三（一六六〇）年に、東蝦夷地の志古津（現在の千歳）に弁財天小社を造立し、御神体を安置したことが書かれている。

『福山秘府』には、同書を編さんした安永九（一七八〇）年の時点で、北海道東部（東蝦夷地）志古津の外にも弁財天を祀った五カ所として、箱館村（現函館市）・上之国村（現上ノ国町）・江差村（現江差町）・伏木戸村（現江差町）・突府村（現乙部町）が記載されているが、これらはいずれも和人地内であり、海岸部の漁場である。志古津だけが東蝦夷地であり、内陸である。シコツに河川と漁の弁財天小社を造営したのは、シコツ川（のちの千歳川）流域でアイヌと交易をしていた和人であろうか。彼らは越年を許可されていなかった。『福山秘府』では当時、弁財天小社が志古津のどこに建てられていたのか位置までは読み取ることができない。

「志骨」 シコツが「志骨」として記載されるのは『蝦夷商賈聞書』（元文四年・一七三九）である。シコツは「志骨大場所也」として場所請負制度の運上人八人が紹介され、シナの樹皮で縛った縄を生産すること、鹿皮、熊皮、干鮭など豊富な産物の出所が記述されている。ただし、「大

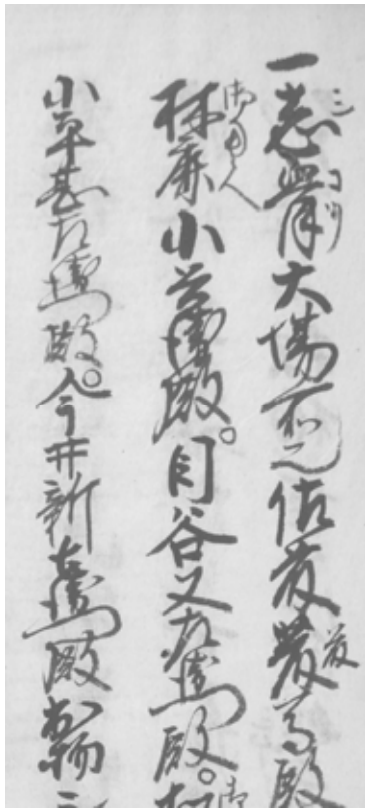


写真-1 『蝦夷商賈聞書』に見える「志骨」、元文4（1739）年

場所」と記されているシコツは、現在の千歳地域のほかも含めた範囲を指している。同書により、初めて「骨」による表記が出てくる。

「支骨」 「支骨」は、水戸藩の医者木村謙次が幕府支配勘定近藤重蔵の秘書役として、エトロフ島（現北方領土）に赴き、初めて日本領としての標木を建てたときの調査日記、『蝦夷日記』（寛政十一年・一七九九）にみられる。

同日記では、「訪 差離屋 支骨流水湍 二三漁子宅 不知魚市中 何処差離屋」のように、「支骨」を漢詩に用いている。日記の平文ではカタカナ「シコツ川」を使用していることから、「志骨」「支骨」は、歯切れ良く表現したい場合や、漢詩など文字に対して特別な視覚を意識した場合に限って用いたようだ。木村は、千歳が鮭漁の不漁によって、二、三軒の漁家が空家状態となった様子を漢詩に記した。

また、時代は下るが、松浦武四郎の『夕張日誌』（安政四年・一八五七）の絵図には、「題 支骨湖図」（現支笏湖のこと）がある。羽太正養が文化二（一八〇五）年に「シコツ川」を「千歳川」に改名して五十二年後のことであり、もちろん武四郎は川名には「千歳川」と記している。

このように、一音一字の表記が漢字表記に移行していく時期は、幕府がシコツを含む東蝦夷地を直轄地とし、松前藩が開設した場所請負人を廃止し、運上屋を会所と改めた寛政十一（一七九九）年の時期に重なる。エゾ地において内地的には和人によるアイヌ民族の支配が進み、和人の往来が頻繁になる。対外的には、元禄十（一六九七）年にはロシア人がカムチャツカ半島を征服、以降千島列島を南下し始め、安永七（一七七九）年にはロシア人が松前藩に通商を要求するにいたる。天明七（一七八七）年はフランス船が日本北地を探検するなど、この頃からヨーロッパ船の出現も多くなる。幕府は国境を明確にし、周辺の地理を把握するために正確な地図等を

必要とし、巡検（実地調査）を繰り返した。この過程において、アイヌ語地名の和語への置き換えも進むこととなる。

次に紹介する羽太正養が、「シコツ」を「千歳」に改名することにより、アイヌ語とは切り離された和名「千歳」が誕生することになる。

二・シコツ川を千歳川に改名

文化二（一八〇五）年、箱館奉行羽太正養が「シコツ川」を「千歳川」に改名した。改名の所以を、羽太は自著『休明光記』（巻之五）に次のように記している。同書は羽太の在任期間、寛政十一（一七九九）年から文化四（一八〇七）年に至る東蝦夷地経営の顛末を記録したものである。

文化元年 亀田村万年橋を造る。亀田村の橋なれば万年を以名とす。

文化二年丑年 ユウブツの内シコツ川といふ川有。此川の名となへあしければ改度よし、其所を受け持ちたる山田鯉兵衛よりいふ。彼川は鶴のあまた居る所なれば則千とせ川と改む。是も同年の事なり。

これによると、文化元（一八〇四）年、亀田村（現函館市）に架けた橋を亀にちなんで「万年橋」と名づけた。文化二（一八〇五）年、ユウブツ地域を担当している箱館奉行支配調役並山田鯉兵衛が、「シコツ川」は唱えてみると音の響きが悪いので正養に改名を申し立てた。正養は、亀田村の橋は「亀は万年」の中国の故事ちなんで「万年橋」と命名した。したがって鶴が多く棲息している「シコツ川」は「鶴は千年」にちなんで「千歳川」とした。『休明光記』からは以上のことがわかる。

このいきさつを記録したものが釜加神社弁財天を安置した厨子である。釜加神社の厨子 厨子背面に次の一文が書かれている。

あきらけき御代の御ひかりは、至らぬくまもなく、こさ吹（く）蝦夷が島までも御恵をかしくみ、たびまつる事になん、その島のうち、ゆふぶつてふ所

に、しこつ河となんいへる川有、この河何とやらん、とのふるひびきのよからなば、山田嘉充が云ふよりて、そは鶴のあまたをり居る所なれば、千と世河ともいふべきやなと、たはぶれしに、夫（れ）なんよかめりて、嘉充其（の）河のほとりに弁財天を勧請し、なお其（の）ことあらましをしるさまほし、といふにまかせて、遂に禿筆とりてつたなき言の葉かきつけ待るものなるかし。末ひろきめぐみもしるし河の名の千とせをかけてしむる宮居は

于時文化二年乙丑春三月

従五位下藤原朝臣正頼謹誌

厨子由来文の要旨 「明るいご時世の光は国のすみずみまで照らしているので、えぞが島までもその恩恵をいただくことになるであらう。その島のなかの勇払という所にシコツ川という川がある。この川はどうしてだろうか、呼ぶのにひびきがよくないから変えてほしいと山田嘉充（鯉兵衛）がたのむので、その川は鶴がたくさん舞い降りて棲んでいる所なのだから、



写真-2 釜加神社（現：釜加72番地の11）



写真-3 弁財天厨子の裏面

「千歳川」とでもいっただらいいだろうと冗談を言ったら、嘉充がそれは良
い名だとし、弁財天を勧請し祀るので、それに改名のいきさつを記してほ
しいと頼むので、口頃愛用している筆を取り、拙い文を書くことになった。

川の名のとおり千歳にわたっておわしますこの社は、いつまでも「利益
があらたですよ」(長見義三「市史つれづれ」『広報ちとせ』86頁)を一部改め、
引用)

冒頭にある「明るい時世の光は国のすみずみまで照らしているので、
えぞが島までもその恩恵をいただくことになるであらう」という文言こそ
が、幕府による蝦夷地直轄の威光を顕示しようとする姿勢を表している。

文中には、『休明光記』同様の改名のいきさつに加えて、山田嘉充(鯉兵
衛)が、新たに文化二(一八〇五)年、弁財天を勧請したことも記してい
る。

弁財天を勧請 それでは、厨子を奉納した弁財天社はどこに造営され
たのだろう。時代は下って安政四(一八五七)年、玉虫左太夫(仙台藩士)
が記した『入北記』のなかに、造営位置の記述がみえる。

九月八日 快晴 朝白霜

(前文省略)千歳川会所へ帰着、已ニ未牌ナレバ辺ヲ一見セント馬ヲ捨テテ歩
行ニテ弁天社等ヲ一見シタリ。此弁天社ハ会所ヨリ申ノ方ニ当タリニ二丁斗リ
行キ小山ニ安置セラレタリ、此間ニ土人家六七戸見ヘタリ、サテ千歳川ハ弁天
社ヨリニツニ分レ会所傍ニテ又ニツトナル

千歳川会所とその船着場は、現在の千歳橋の近く、ホテルかめや(本町
一丁目)の位置にあった。会所より申(西南西)の方角へ一、二町(二〇
〇)前後行つたところの小山に安置されている、といえ、およそ現在の
千歳神社にあたる。現在は、千歳神社境内の一角に、文化二年造営の弁天
社の痕跡を示す標柱が立てられている。

その後、弁財社は地元の漁場持の新保清次郎が、明治二十二(一八八九)
年、千歳川下流の釜加の自宅庭に堂を建て祀っていたが、明治二十八(一
九〇五)年、釜加神社(現在の釜加七二番地の一一)を建立し奉納した。
改名前の千歳(シコツ) 改名直前の千歳の様子を記録した二つの旅日
記があるので紹介する。

(一)寛政十(一七九八)年、武藤勘蔵の『蝦夷日記』^(c)は次のように記し
ている。

七月二十五日 シコツ越とてイシカリ川を船にて登る道あり。この道を
出立す。トイシカリといふ所にて、船中に泊す。二十六日、未明に出船。
イザリ川といふ所にて日もくれ、又々船中に泊す。(中略) 二十七日、
タガたシコツに着船す。二十八日、同所出立。船路にて東蝦夷地ユウブ
ツに着船。一日逗留。

(二)享和元(一八〇一)年、磯谷則吉は『蝦夷道中記』^(a)で次のように記
す。

(五月)四日、申刻過、ウツ口舟に乗(此舟は巾二尺計、長二間計の大
木をくりたる也。棹取之夷人三人、番人一人惣て七人座したりてみな自
由なりがたし)シコツ川を下る。早き事矢のごとし。壱里半計にしてオ
サツトウに至る。周廻凡五里計もあるへし。湖沼ナドノコトヲ夷人唱テ
トウト云。本邦ニテモ池沼ノコトヲ堤トイヘバ是モツツミノコトニテ塘
ナルヘシ。ルウサンより三里余にしてイヒツと言所に至るに、酉の半刻
頃なればいとくるぶして、東西をわき難し。(後略)

改名後の千歳 改名直後の千歳の様子を記録した二つの旅日記があるの
で紹介する。

(一)一つは文化四(一八〇七)年十月、石狩から千歳を経て勇払へ抜け
た田草川伝次郎の『西蝦夷地日記』^(b)である。同書は、文化三年から四

年にかけてロシア船が北辺を襲撃した後、幕府の若年寄堀田摂津守に
随行して蝦夷地を調査したときの日記で、西蝦夷地直轄の下調べも兼
ねていた。

千年川は御用地に成りて之名のよし 元はシコツなり、沼名、川名、
地名とも同じ、今（不明）川名、会所、地名とも千年川なり イヘツ
の上シコツ沼なり、千年川はシコツ沼へ流入（略）
（二）次は、文化六（一八〇九）年、夏、勇払から千歳、さらに石狩へむ
かう道程である。

津軽藩士竹内甚左衛門が、松前から宗谷にいたる蝦夷地検分時の行
程を詳細に記した『西蝦夷地旅行日記』自弘前 西蝦夷地宗谷迄之往
反』をみてみよう。同日記は、これまであまり知られていない史料な
ので、少し長いが引用する。竹内は千歳で一泊し、シコツ沼（現長都
沼）、カマカを通過し江別川を下ってエベツト、日本海の石狩湾へ抜
けている。^、v内、句読点は筆者の補足による。

一、七月廿七日 早朝止宿^ハユウフツ^ツを発し、会所前^キ町斗行川有此事
より川船（丸木船数十艘有大将分之乗船き一艘有幅^キ間斗長さ五間位も
可在丸木船は上^口三尺位底式尺斗荷式筒斗入乗組四人船之者一人斗）流
に遡り^ビ迄五里之間川船也、川幅三、四十間 左右芦原流甚静也河上二
里斗にて沼有ケフンケ湖と云長サ半里余内廻^二里斗と見ゆる（ケフンケ
の沼八勇武津川水源也此所より四方打ち開けたり 申西之間太郎前嶽戌
の方シコツ山申の方老白辺之高山打続く丑寅に當り石狩嶽ユウバリ山
何れも高幽に見ゆる近辺山なく洪漠之土地也 夫より半道程船行、小休
所有是迄之内河式筋落合ふなり。小休之辺より段々川幅狭くなり、左右諸
木多し、吉里半里斗舟行き、川筋屈曲にして幅五六間位も有可、段々水上
に登り次第幅式三間になる 昼所^ヒは是迄五里の川船也（勇武津川水上

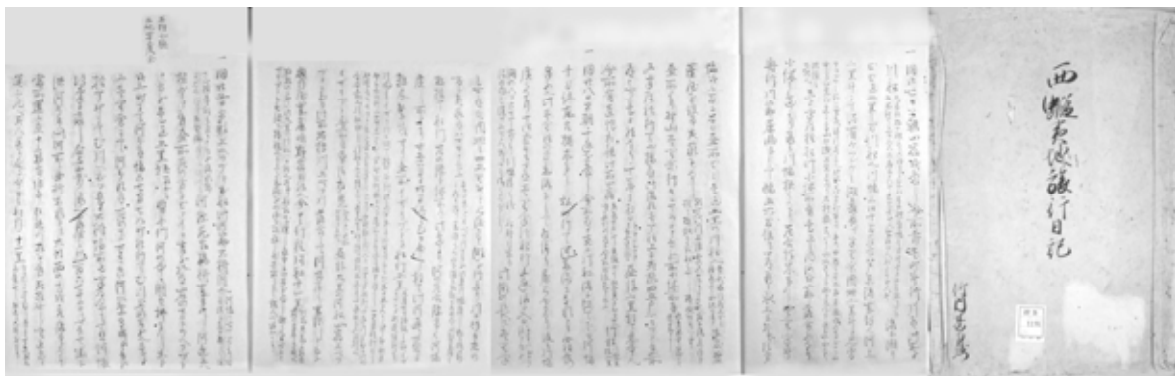


写真-4 西蝦夷地旅行日記（部分）文化6（1809）年：人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵

び、湧水にて小沢なり）支度処蓬屋を設け
夷家もなし（都て此川不深五六尺かきりと
見へ故に流にのほると雖も棹越るる故船
はやく櫓機を用へず）昼所より野山吉里余
行キシヤラコと云ふ所休所有（此辺林中
白砂^{（白）}にて道甚よし）又半道程行て、小橋有
此流れ^{（上）}丁程上に夷家四五戸マツと云
ふ所道と聞 是より程なく千年^{（上）}に至る
（もとハシコツと云ふ、近頃改る） 昼後
二里都て林中也會所有 造作相応此所止
宿（夷家廿戸斗漁獵少く仕入負に至るゆ
へ、唯通行の為に会所を設置と云ふ）行程
（川船五里、陸二里）
一、同廿八日 早朝千年を發し会所前よ
り直に川船流に從て下る 河幅十間位
左右樹木多し、数町行て河両流になれとも
無程落合ふ也 此吉里程の間 急流にし
て水清く底見ゆるなり 段々川幅広くな
り、十四五間も可有 吉里半程船行千年沼
に入る（もとハ、シコツ沼と云ふ湖の入口
六七丁前より川幅広く浅し 船難航所有
沼の内も深さ三四尺位も可有浅く見ゆる
なり） 此湖の長さ吉里半も可有哉、内廻
も四五里斗と見渡る、湖を行畢り川に移
る左の方に夷家有ハマカと云ふ（是より

末をイベツ川と云ふ 此辺川幅広し以下段々流も静かに水濁り甚深く見ゆる深き故静かぶに甚強し見ゆれと水勢い) 数拾丁船行左の際に休所有此の辺より河の左右際高く河幅広し所により廿五六間より卅間位にも至るへし都て此河通り左右より雑木繁茂せり昼所イザリフト迄船行五里(九月七日帰路の節イザリフトより新道陸行なり、川向よりイザリ川に拾丁行、此辺芦原にて打開けたる所也、夫より林に入り式丁斗行き、野辺を行、止宿より二里斗芦野を行林に入る范所々に有れども林中道よし一里半程行きし野合有ヲサツと云ふ 昼支度蓬屋有夫より無程林之内へ入り一里半程行千年川に至る 川向否会所也 川船渡し川船も五里 陸道も五里也今日船と陸と同刻出立して千年着も同刻也) イザリフト普請相應会所有也 (登に八此所止宿に相成ル) 昼後九里の川船止宿エベツトに至る此所石狩川エベツ川落合にて河幅広く甚深しと云普通行屋甚廉略野宿同様也 今日之行程川船十四里 (此所夷家三軒有 船八千歳より通シ也 帰路の節は此九里の川船一日路也 登り船故尤も遅し 夜中に止宿を發し 漸々暮時にイザリフトに着致ス 櫓櫓のミにて急流を登る故存之外果敢とらし旅人可得心なり

田草川と竹内の二人とも、勇払場所請負人山田屋文右衛門が文化二(一八〇五)年同六(一八〇七)年の間に開削した、千歳を挟んで東側の千歳〜ビビ間(二里)、および西側の千歳〜漁間(六里)の「新道」を通っている。千歳〜ビビ間は、牛馬車を通すよう整備した「ビビ山道」といわれている。また、石狩から帰路の竹内甚左衛門は、石狩川(千歳川)と漁川が合流するイザリフト(現恵庭市域)で船を降り、陸路をとった。林を抜け、オサツ川を渡り、千歳会所まで歩いて到着した。その時の様子を「船、陸路ともに五里の行程で、到着時刻も同じであった」と記している。この漁太〜オサツ〜千歳の新道は、千歳川を船で遡るとき、標高差により急激に流れが速くなる千歳会所下流一キロ付近の難所を回避できることから、重

要な道路となる。のちの安政五(一八五八)年に島松〜千歳間が開削され、銭函から発寒、札幌を経て豊平川を渡船で渡り、ツキサップを抜けて千歳に至る河川に頼らない街道が完成すると、松浦武四郎はビビから千歳、千歳から札幌・銭函までの陸路を「東西新道」と呼んでいる。

以上二つの旅行記は、寛政十一年の東蝦夷地直轄を画期として、以降「シコツ」は千歳川、千歳会所、地名も千歳に変わったことを記している。

箱館の亀田との関連 これまでに、『千歳市史』(更科源蔵著、昭和四十四年)では、千歳改名の年次とその理由を、現函館市の亀田改名説に依拠して解説している。すなわち、「渡島大野付近と千歳付近をアイヌ又はシコツと呼んでいた。」「シコツは死骨に通じ、しかも千歳の近くにはユウフツがあつて、これは「有佛」に通じて不吉なので、渡島のシコツは当時すでに水田化されていたので、亀田と命名し、千歳の方は深い葦原で鶴が沢山生息していたので千歳とした。これは文化二年のこと。」「

ところが、この説は『函館市史 別巻亀田編』(昭和五十三年)による以下のような検証と判断に基づき根拠を失っている。

文化四(一八〇七)年『松前紀行』に、「亀田川を越え万年橋を渡るこのあたりは志こつといひしが、ゆゆしき名なるとて近頃改めしとぞ」とあるが、

「亀田」の地名が最初に見られる文献は、この文化四年よりも一三七年も前に遡った寛文十(一六七〇)年の『津軽一統志』の記事に、「一、亀田川有 濶あり 古城あり」と、すでに「亀田」が記述されている。

寛文年間(一六六一〜一六七二)の地図には、「亀田」はすでに書かれている。

函館の「志こつ」は、『松前紀行』以外にはその名すら発見されていない。『松前紀行』の他の箇所では、シコツはもっと広域の意味で使用されて

いる。

「シコツは死骨に通ずる発音なので縁起の良い、亀田に変えた」という説は、明治以前の文献には見当たらない。

永田方正は明治二十四（一八九一）年、『松前紀行』を引用して『北海道蝦夷語地名解』に渡島の「シコツ、大谷、亀田辺ノ元名」としたのではないが。明治以降に『松前紀行』の「シコツ」と「亀田」の両者のつながりを上手く結びつけるために考え出したものであろう。

渡島の亀田命名説は「亀が生息していた」など他に諸説がある」と説明している。

したがって、『千歳市史』の更科解説部分は、明治以降の永田方正を引用し、さらに羽太正養の『休明光記』に余分な自説を加えたものである。

ここで明確なのは、羽太正養が亀田村の橋を亀にちなんで「万年橋」と名づけたのが文化元（一八〇四）年、シコツ川を鶴が生息するので千歳川と改名したのが翌年の文化二（一八〇五）年ということである。つまり、羽太正養は万年橋との関連で千年の千歳と命名したのである。さらに、先述したように漢字表記に「志骨」「支骨」はあっても、更科解説にある「死骨」と原文に書いた日記等の諸記録について、筆者は未確認である。ただ、編さん物の『北海道志』⁽¹⁾（明治十七年刊行）に「旧名志古津、国音死骨ト通ヌ故ヲ以テテ寛政年間箱館奉行羽太正養改メ名ク」とある。

四・シコツ発祥の地

アイヌ語地名では、地形や場所の特色・形状・植生を指して呼ぶことが多い。では、実際のシコツはどの場所・地域を指しているのであろうか。これについては次のような諸説が述べられている。

(ア) 知里真志保は一九五四年、シコツはもつと広い範囲の地域を指している。「つまり、石狩・勇払間の石狩低地帯を指し、東西南北からの口

をそれぞれ、夕張（イ・ブツ）そのの・口、漁（イ・チャル）そのの・口、ユウフツ（イ・ブツ）そのの・口、江別（イ・ブツ）そのの・口」と呼んだのであろう」としている。

(イ) 山田秀三は一九七八年、地形を基準にしたアイヌ地名のつけ方の「くせ」から考えると、千歳市内の地形は大小さまざままで明瞭な該当場所を挙げることができず、「解しにくい」と言つ。支笏湖に向かつて、市街地から上の方を眺めると、丘の間が広い谷間の地形をなしているので、千歳川の谷間を呼んだのであろうとしている。

(ウ) 長見義三は一九七六年、石狩、勇払地方を含む道央低地帯、千歳川の全流域、ふ化場から上流の溪谷、旧千歳市街を中心とする千歳川下流の地帯としながら、「統治する」という觀念のなかつた古代人は、広大な地域を示す地名を必要としなかつた。狭い範囲の生活で事足りたほど天産豊かであつたからか。その意味では疑問である。

ただ「はふじや地名解」で古老方の支持を得ている。また、かつて知里真志保が北栄（市内）の坂から市街を見下ろしてこれがシコツと叫んだと伝えられている。古人は自衛隊第七師団寄りのキサラオマコツの方を小さい窪地と意識し、それに対してここ北栄をシコツと呼んだか」と記している。

(エ) 長見は一九八三年、『増補千歳市史』においても、シコツの位置については前記の説明までで攷筆している。

シコツとポロコツでは、本当のシコツはどこか。この疑問に対して新たな説が登場した。

(オ) 榊原正文は平成十四（二〇〇二）年、シコツに対するポロコツ（広い窪地・大きな窪地 Porokot）が、明治二十九（一八九六）年陸地測量部五万分一地図にカタカナ表記されていることを指摘している。

ポロコツの地名は、千歳川を越える街道に架かる橋（現在の国道36号「千歳川橋」にあたる）の約二^三段北西側の「窪地」（現在の千歳市信濃）に記載されている。同地図では、ポロコツは最大幅二〇〇メートルの谷・凹地として描かれているが、現在では市立北斗中学校の西側（自衛隊演習場内）に、幅一〇〇メートル程の凹地が二つ並んで合計幅二〇〇メートル、深さ一〇メートルとなって残存している。同校の東側は市街地に埋め立てたために復元できないが、長さは一^三段は続いていたものと推定され、その地名が意味する通り、かなり規模の大きな凹地であったものと考えられる」としている。

ならば、対する「真に大きい・広い窪地」であるシコツはどこなのか。それは、青葉公園がある丘陵と北海少年院がある丘陵に挟まれた河谷である。市内地図を見ると、国道36号から千歳川上流に向かって現在の錦町・緑町・春日町・大和・桂木の各字名一帯が、千歳川対面の青葉公園の山の法面として、「ポロコツよりも大きい凹地状態で長さは約一・五^三段、幅は七〇〇から八〇〇メートル、深さ四〇メートルである。この場合、谷・窪地の形状を深い渓谷・窪地というよりも、広い谷・窪地と捉えたほうが適切である。

榊原も山田秀三とほぼ同じ場所を指摘している。ここが本当のシコツ、つまりシコツ発祥の地としても良いであろう。図で説明すると、斜線模様で表した一帯を指している。小さい方がポロコツの広い窪地で、対する真に大きい広い窪地が、大きい方の斜線一帯のシコツ地域である。両方の窪地を一つの視界に入れて確認したいところであるが、現在は建物が混み合っていて見通しが利かないのが、残念なところだ。

シコツ、ポロコツの二つの窪地は、ともに、安政四（一八五七）年、箱館奉行が勇払場所請負人山田屋文右衛門、石狩場所請負人安部屋伝次郎に對し、水路によらない道路の開削を命じ、翌安政五（一八五八）年に完成

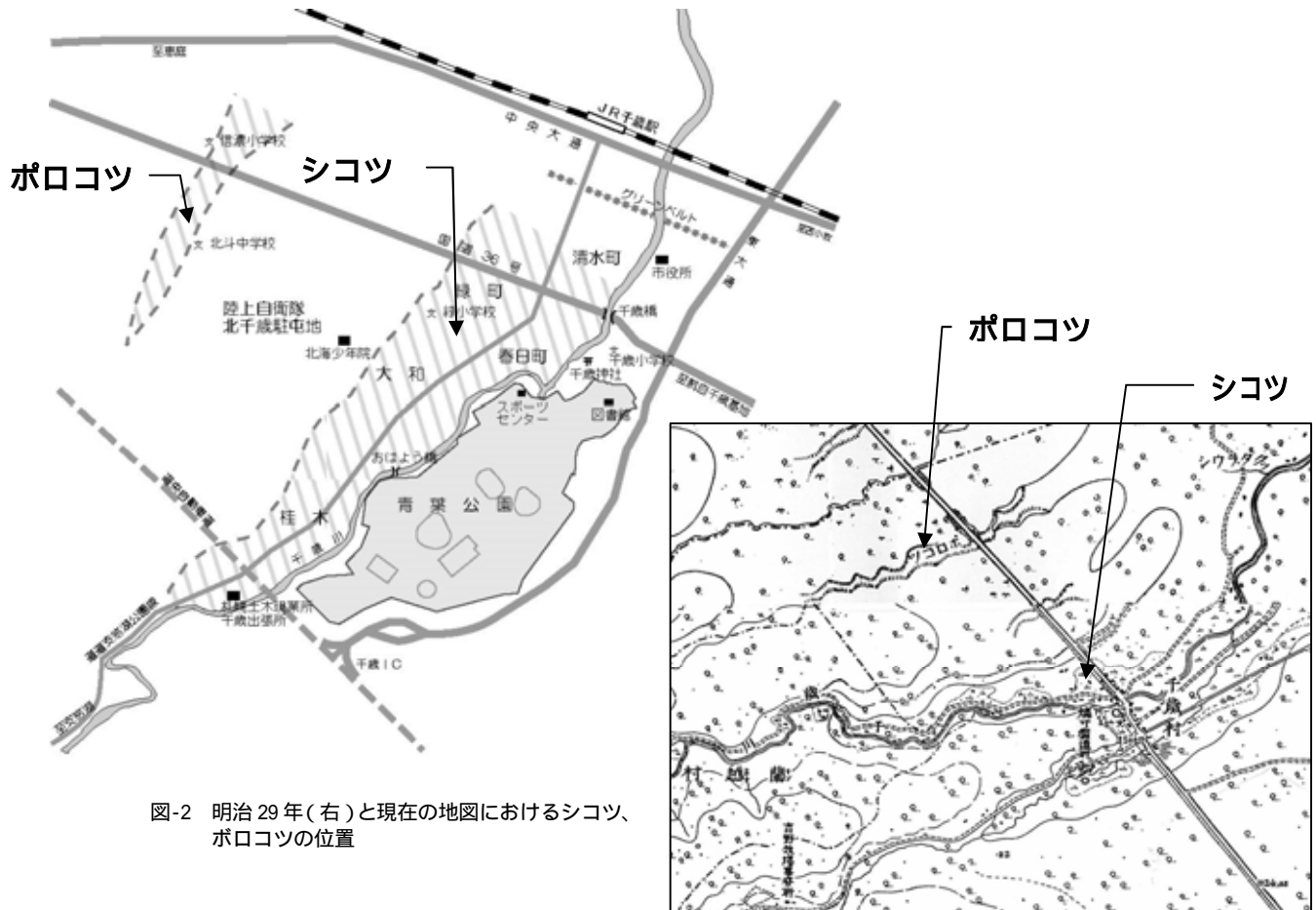


図-2 明治29年(右)と現在の地図におけるシコツ、ポロコツの位置

した街道（現国道36号）を横断する共通性を持っている。シコツアイヌの人々は、『福山秘府』に記録された万治元（一六五八）年から、明治二十九（一八九六）年頃までに至る約二四〇年間、シコツとポロコツを目印や道標として、効果的に使い分けて生活していたのであろう。

しかしながら、未だ疑問点も残っている。ポロコツは明治二十九年地図上に一回の記録があるのみで、今のところ、他の文献に見出すことができない。「シコツ」（真の・谷）と「ポロコツ」（広い・谷）の対応・対比の妥当性も吟味が求められる。

ところで、「勇払・石狩間山道」の千歳とトビの間には、「ヲホコツ」（深い・谷）、「キサラコツ」（耳のある・谷）の地名もある。シコツがあり、それに対してポロコツ、ヲホコツが生じたのであろうか。

おわりに

寛政十一（一七九九）年に徳川幕府が東蝦夷地を直轄とし、さらに文化四（一八〇七）年には西蝦夷地も直轄とする。この間の文化二（一八〇五）年に千歳に改名された。それ以前は、川名、地域名、沼名をシコツと呼んでいた。

ただ、沼名については、現在の長都沼を「シコツ沼」と呼んだ先述の田草川伝次郎や竹内甚左衛門の例と、一方、現支笏湖と認識して呼んでいる、勝知文（福居芳麿）や磯谷則吉の例がある。勝知文は『東夷周覽』（享和元年・一八〇二）で「シコツ沼。此沼より落る水筋をシコツ川と云。磯谷則吉は、『蝦夷道中記』で「シコツ川と云。水源はマニハノボリの碁シコツトウより流レ出ル」と記している。このように「シコツ沼」は、二通りに認識されていた。

認識の相違がどこから生じたのか。シコツ沼はシコツ川の水源だと理解

している勝や磯谷は、「タロマヘノホリ」（現樽前山のこと、ノホリ）ヌプリ（は山の意味）、「イシャリノホリ」（現恵庭岳）を実際に踏査している。あるいは、案内人のアイヌ民族を石狩やユウフツから頼んで来た場合は、千歳地方の細かい地名について不案内のため、単純に一般的な呼び名として沼は「シコツ」（窪地）と呼んだのかも知れない。

シコツ沼が、「支笏湖」の名称、漢字表記になるのは、松浦武四郎の安政四（一八五七）年『夕張日誌』が初出である。現在、シコツの名称が残され、継承されているのは「支笏湖」のみとなった（文中敬称略）。

付記 竹内甚左衛門『西蝦夷地旅行日記』の引用にあたっては、高橋由彦氏翻刻「西蝦夷地旅行日記」（たきかわ歴史地図研究会『古地図に見る西蝦夷地とイシカリ川筋』平成十九年）の解説を参考にした。

註

(1) 地蔵慶護が、『千歳民報』に平成五（一九九三）年十月二十日から十二月十五日にかけて、「シコツ歴史散歩」を四八回連載した。このなかで、松浦武四郎著『夕張日誌』「東西蝦夷場所境目取調書」を足で歩いて検証した結果、シコツの位置を、「この沼四里四方」と書かれた「オサツトウからマイトウにかけての大沼、すなわち、大きくなくぼ地をシコツと呼んでいたのだらう」というのが私の結論としている。その裏づけ史料に、田草川伝次郎『西蝦夷地日記』の「イヘツの上シコツ沼なり、千年川はシコツ沼へ流入・・・」をあげて説明している。

(2) 知里真志保 昭和三十一（一九五六）年 『地名アイヌ語小辞典』

(3) 海保領夫 平成十一（一九九九）年 『蝦夷地のころ』北海道開拓記念館常

設展示解説書③ 一一頁

(4) 『松前国蝦夷図』天和元（一六八一）年 高倉新一郎編著『北海道古地図集

成『昭和六十一年所収』

- (5) 『新撰北海道史』第二巻 通説一 昭和十二(一九三七)年所収
- (6) 『蝦夷商賈聞書』元文四(一七三九)年 函館市中央図書館蔵
- (7) 『新撰北海道史』第五巻 史料一 昭和十一(一九三六)年所収
- (8) 山崎栄作 昭和六十一(一九八六)年 『木村謙次集 上巻』
- (9) 松浦武四郎 『夕張日誌 全』 北海道立図書館マイクログフィルム
- (10) 『新撰北海道史』第五巻 史料一 昭和十一(一九三六)年所収
- (11) 昭和五十二(一九七五)年四月二十三日、千歳市指定有形文化財となる。
厨子とご神体弁財天像は現在、千歳神社に安置されており、レプリカが千歳市立図書館に展示されている。
- (12) 武藤勸蔵 寛政十(一七九八)年 『蝦夷日記』
- (13) 磯谷則吉 享和元(一八〇一)年 『蝦夷道中記』
- (14) 田草川伝次郎 文化四(一八〇七)年 『西蝦夷地日記』 中山利国編(昭和十九年・石原救龍堂)
- (15) 竹内甚左衛門 文化六(一八〇九)年 『西蝦夷地旅行日記』(津軽家文書)所載、人間文化研究機構国立国文学研究資料館所蔵)
- (16) 元文四(一七三九)年の樽前山大噴火により、積もった火山灰のこと。
- (17) 山田文右衛門が私費を投じて改修した道で「千歳越え」と呼ばれる。安政五年六月、千歳から勇払を越えた松浦武四郎は、戊午日誌の中に「東西新道」と記し、「右の方是より坂を七十八丁下るやヒベンコ本名ヘンケヒ」といへるよし 上の冷水の湧出る処と云り 此処に四尋も深き水湧壺一ツ有しと 其にて号しものよし。番屋一棟有 従チトセ此処まで二里 先年より此道無しを山田文衛門といへる者 此処を切開、馬 牛 車の三つの通路をつけ、チトセ会所元の鮭を皆ユウフツ下げに致し候様に致せしもの也 此処より小舟にて凡そ四里にてユウフツ会所へ着す 余先年来たりし時は此処より船にて

下る也 然し当時其川すじ千せし致して 舟通りがなくなり 今は此処の番屋は廃せしとかや」と記す。

道筋は、千歳会所 ママツ ルウサン ヌブノシケ キサラコツ オホコツ ルイカウシコツ 追分 右へ行けばビビ、左へ行けばパンケビビで、かつての室蘭街道とほぼ同じ道筋となっている。

- (18) (17)に同じ。
- (19) 開拓使が「十年計画」を実施、経過して明治十五(一八八二)年二月に廃史するにあたり、同十七年に大蔵省が刊行した開拓使時代の地理・風俗・政治・外事・物産に関する事項。同書は、千歳改名の年次を寛政年間として誤記している。

- (20) 知里真志保「北海道駅名の起源」 佐々木利和編『アイヌ語地名資料集成』所収(昭和六十三年 草風館)
- (21) 山田秀三 昭和五十三(一九七八)年 『アイヌ語地名の研究3』
- (22) 昭和四十八(一九七三)年ころ、長見も参加した山三ふじや(株)の社長渡部茂、関亀三、林元一の三人が中心となり、地名も含めた千歳のアイヌ文化全般について古老たちから聞き取りを行った覚書のことを指し、刊行物ではない。
- (23) 長見義三 昭和五十一(一九七六)年 『ちとせ地名散歩』北海道新聞社
- (24) 榊原正文 平成十四(二〇〇二)年 『データベースアイヌ語地名3』石狩 『北海道出版企画センター』
- (25) 伊能忠敬 文政四(一八二二)年頃 『蝦夷国測量図』